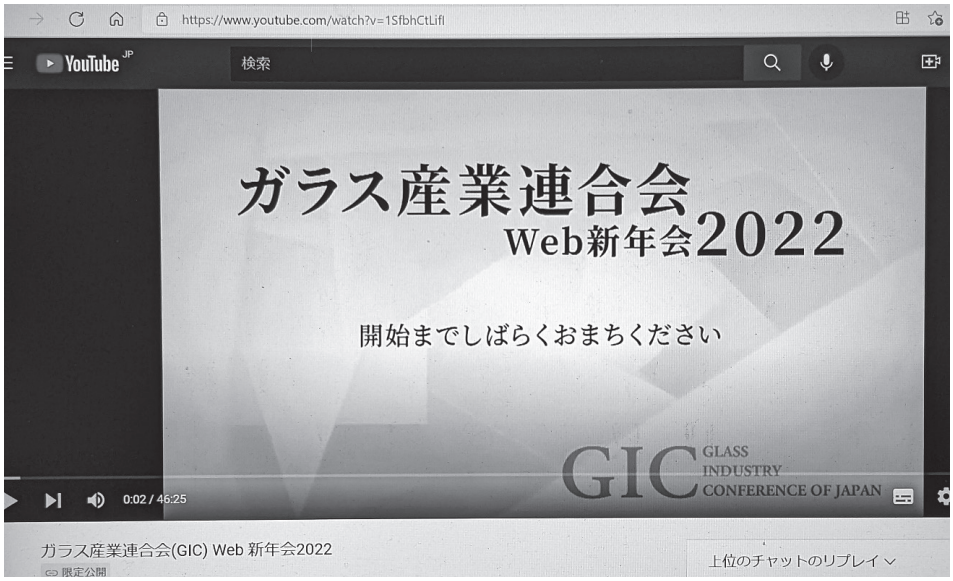
関連団体

2022年「ガラス産業連合会 Web 新年会」報告

（一社）ニューガラスフォーラム事務局

Report on the 2022 Web New Year Party of the Glass Industry Conference of Japan

New Glass Forum



2022年1月21日㈮，ガラス産業連合会（GIC）新年会がWebにて開催され，ライブ配信されました。ガラス産業連合会は2000年3月設立ですが，この新年会は2002年から開始され，今回20回目となります。昨年は新型コロナ感染拡大のため中止致しましたが，今年はコロナ禍の中，Web形式ではありますが，無事開催することができました。この新年会は，ガラス産業連合会に加盟する板硝子協会，硝子繊維協会，電気硝子工業会，一般社団法人日本硝子製品工業会，日本ガラスびん協会，および一般社団法人ニューガラスフォーラムの6団体で主催しており，今年は一般社団法人日本硝子製品工業会の井上専務理事の司会で行われました。

板硝子協会会長

硝子繊維協会会長，ガラス産業連合会副会長

電気硝子工業会会長

一般社団法人ニューガラスフォーラム会長

加盟6団体の，清水正 板硝子協会会長（セントラル硝子株式会社 代表取締役 社長執行役員），松永隆延 硝子繊維協会会長（日東紡績株式会社 執行役グラスファイバー事業部門 副部門長 兼 パラマウント硝子工業株式会社 代表取締役社長），森山賢三 電気硝子工業会会長（AGC株式会社 専務執行役員 電子カンパニープレジデント），島村琢哉 一般社団法人ニューガラスフォーラム会長（AGC株式会社 取締役兼会長），そして，山村幸治 一般社団法人日本硝子製品工業会会長兼日本ガラスびん協会会長（日本山村硝子株式会社 代表取締役 社長執行役員）の各会長からの一言ご挨拶に続き，ガラス産業連合会の山村会長から新年のご挨拶がありました。その要旨は以下の通りです。

一般社団法人日本硝子製品工業会および日本ガラスびん協会会長，ガラス産業連合会会長

昨年は，新たな変異株が次々と出現するなど世界中が新型コロナウィルス感染症に翻弄される中，年後半からは経済活動の回復に伴う原油・資源高や，人手不足による港湾荷役・物流の停滞等により大きな混乱も生じた。国内では，医療逼迫を背景にまん延防止等重点措置・緊急事態宣言の適用が続いた。このような経済環境の中，GIC加盟6団体の概況についても業種により様々な状況であった。

昨年のCOP26において，気温上昇抑制（1.5℃）目標が採択された。脱炭素への流れが一段と加速し，ガラス産業にとってもSDGsのゴール目標やカーボンニュートラルへの取り組みな

ど，待ったなしの対応が求められる状況となった。GIC では設立以来，環境問題や省エネ問題を中心に，官庁・学界のご指導の下，各部会が継続的な活動を行っている。現在の主な取組みは，世界の化学物質規制の動向調査，EU の REACH（リーチ）規則への対応，環境関連などをテーマとした講演会の開催，加盟 4 団体計の CO_2 排出量の実績及び GIC の活動と SDGs との関連性のとりまとめとホームページでの紹介，ガラス技術シンポジウム開催などである。

政府の 2050 年カーボンニュートラル実現の方針もあり，ガラス産業界としてもその実現に向けた取組みが急務となっている。現在は国内外の情報取集に努めているほか，各種の溶融テストも着手されつつある。難しい課題ではあるが，着実に取り組んでいくことが重要と考える。

今年は「国際ガラス年」である。国内では日本セラミックス協会が中心となり，国際ガラス年 2022 日本実行委員会を組織し，各種イベントを企画・運営している。GIC は産業界を代表して日本実行委員会へ各種協力を行うことを約束し，昨年「GIC 国際ガラス年 2022 支援 WG」を設置した。日本実行委員会の協力要請への対応に加えて，GIC 独自企画案の検討も進めている。国際ガラス年 2022 を通して，ガラス製品の価値向上，ガラス素材の研究者育成など，ガラス産業全体の発展につながることを祈念している。

GIC では，ガラス産業の将来を担う人材育成の基盤づくりを目的として NGF と共催で「ガラス研究振興プログラム」を設立し，推進している。昨年 7 月の GIC 総会で承認し，加盟 6 団体・会員企業へ寄付を募るとともに，各大学等へ研究テーマの募集を行った。3 月に研究テーマを採択し，5 月より助成を開始する。本プログラムを通じ，産官学の連携が一層深まり，ガラス研究の裾野が拡がることを期待する。ご協力頂いた各団体・企業に，この場をお借りして厚く御礼したい。

ガラス産業の発展のため当会は環境課題への取り組み，社会への貢献に努めていく。

次に，ご来賓の新川達也 経済産業省大臣官房審議官からご挨拶があり，その要旨は次の通りでした。

経済産業省大臣官房審議官

昨年，世界では経済活動回復の兆しが見えた一方で，東南アジア諸国でのロックダウンやコンテナ不足による供給遅延など様々な要因により，世界経済の相互依存が高まる中での日本の製造業におけるサプライチェーンの在り方が問われた一年であった。国際的な脱炭素を目指す流れ，人権問題への意識の高まりと貿易問題など，製造業を巡る環境は大きく変化しており，日本産業界の発展のためには更なる官民の連携した取り組みが必要と考える。

政府目標の 2050 年カーボンニュートラルを実現するためには，ガラス産業においても業界一体となった挑戦が必要となる。困難な目標ではあるが，世界的な脱炭素を目指す流れの中で，製造プロセスそのものの見直しを迫られることが予想される。他方，ガラスは社会・経済インフラを支える非常に重要な産業であり，様々な課題や挑戦のソリューションにもなりえるもので，それ自体が日本の競争力の源泉となるものである。政府とガラス産業が強く連携してこの課題を克服する必要がある。

脱炭素の流れはチャンスとも捉えている。新築住宅，建築物については，省エネ基準を 2030 年までには引き上げることが示されており，今後ガラス素材・製品による更なる貢献など，ガラス産業界の活躍を期待する。自動車分野でも，

電動化や水素の活用などのイノベーションや自動車のデジタル化の加速が進んでおり，ガラスを含めた素材サプライヤーは，これに対応する新たな付加価値の提供が期待されている。サステナビリティに関しては，ガラスびんをはじめとして3R活動による省エネや資源循環の取り組みを積極的に推進しており，継続的な取組みに敬意を表し，国民の理解が深まることを期待する。経産省は昨年グリーン成長戦略を具体化し，2兆円規模のグリーンイノベーション基金による企業等への研究開発実証支援などに取り組んでいる。今回のカーボンニュートラルの流れは新たな需要創出が期待され，日本の得意とする高付加価値品への追い風ともなる。ガラス業界においても支援事業を活用して競争力強化を進めて欲しい。

「国際ガラス年」を迎える本年，ガラスに対する国民の理解が一層増進され，ガラス産業の将来を担う人材の発掘・育成にもつながることを期待するとともに，国際ガラス年がガラス産業のさらなる発展へとつながっていく，実りあるものとなることを祈念する。

その後，ご来賓の田部勢津久 国際ガラス年日本実行委員会実行委員長／京都大学教授からご挨拶があり，国際ガラス年について成立の経緯などを含めてご紹介されました。その要旨は次の通りでした。

国際ガラス年日本実行委員会実行委員長
／京都大学教授

〈国際ガラス年の国連目標〉

・歴史を通して文明の発展に貢献したガラスの役割を示す。
・一般の人に，歴史と芸術，文化とガラスのつながりに気づいてもらう。
・教育，産業，研究，美術館などを含む組織を通じ，ガラスに関する研究を加速することで，平等に，持続可能な発展と生活の質を向上させる。
・ジェンダーのバランスと発展途上国／新興経済国のニーズに取り組みながら，若者のための科学と工学に焦点を当てた世界規模の協力体制を作る。

※若い世代の方，優秀な方がガラスの分野に入ってこられるような下地作りに全力を尽くして取り組んでいこうと考えている。

〈国際ガラス年成立の経緯〉

2014年　米コーニング社がガラス時代の到来を提唱
2015年　国際光年の関連学会でガラス材料の重要性を認識するイベント盛ん
米セラミック学会誌論文誌 Int. J. Appl. Glass Sci. にて“Glass and Light”特集号出版
2016年　同誌で”The Glass Age”特集号出版
2018年　ICG2018年会（パシフィコ横浜）　国際ガラス年を目指す決意表明
2018～2019年　ICG会長がガラス関連団体と共同で賛同書集め
2019～2020年　5大陸80か国より1600通の賛同書（日本：78機関）
2021年　国連総会にて決議案採択（5月18日）

〈主なイベント〉

2022年1月28日　2022国内オープニングセレモニー（オンライン）
2022年2月10，11日 国際オープニング会議（スイス・ジュネーブ）
2022年12月8，9日　国際クロージング会議（日本・東京大学安田講堂）

※国際ガラス年への協賛金を募っているので，是非ご協力をお願いしたい。

最後に，松永隆延 ガラス産業連合会副会長より閉会のご挨拶がありました。その要旨は以下の通りでした。

「国際ガラス年」がスタートするが，GIC としても「国際ガラス年 2022 支援 WG」において各種企画を立案しており，この機会に多くの方々にガラスという素材を再認識して頂ければと思う。政府は「カーボンニュートラル」など環境対策が産業構造の大転換と力強い成長を生み出す鍵として，様々な政策に取り組んでいる。ガラス産業界も溶解技術の変革など難しい課題を抱えているが，一方でガラスは，「ガラスびん」をはじめ「グラスウール」などリサイクル原料を活用してサスティナブル社会の実現に大いに貢献できる素材である。その製品は Low-E 複層ガラスやグラスウール断熱材として CO_2 削減に寄与するとともに，軽量ガラスびんやリターナルびんとして海洋プラスチック問題の改善に貢献する。

本年も GIC では，この「環境問題」，成長戦略としてのプロセス及び新材料関連技術といった「技術開発」，ガラスをもっと消費者の皆様に親しんで頂くための「広報活動」について産・学・官の連携を一層拡充させ，社会への貢献に努めていく。

今年の新年会は新型コロナの影響で Web 開催となりましたが，滞りなく終了することができました。来年は例年通り対面での新年会が盛大に開催されることを祈念致します。